

平成 30 年 3 月 31 日

T.Kobayashi

つまらなくても面白い 相撲鑑賞  
大阪場所観戦雑記

横綱二人が休場し、出場する一人だけの横綱はやや信頼性に欠けるし、大関陣はあまり当てにならないとなれば、鑑賞する側から見れば「つまらないから、見ない」と思うのもいたしかたないかもしれない。友人の中にはこう言って、「今場所はニュースを見るだけでいいや」という人も少なくなかった。いざ開けてみたら・・・。

横綱・大関陣からの優勝はないだろうという観測の中で、ことによると・・・と噂されたのが西の関脇になった「**柝ノ心**の連続優勝」。出だしで玉鷲・貴景勝の突き押し相撲に躓き、やはりこれまでかと思われたが、その後 9 日目まで 2 敗を堅持した。噂は本物なのかもしれないという要らぬ心配が過ぎたが、二大関に敗れてしまった。しかし、翌日は横綱を正攻法であっさりと破り、ただ者ではないことを示してくれた。左で前まわしを掴む速さ、左右どちらでもまわしを取れば向かうところ敵のない強い引きつけ、これらの作業を前進しながら進めていく力強さが加わり、10 勝 5 敗の好成績をあげての殊勲賞受賞は、大きく評価できる内容だった。31 才まだまだ上位への進出の可能性が感じられる。

小結になった**逸ノ城**は、体の大きさを上手く使って、じわじわと前進していく、どっしりした相撲が続いて前半戦の土俵を沸かせた。10 日目まで 2 敗で走り、ことによると・・・と騒いだ人もいたらしい。ところが、11 日目の鶴竜戦で敗れたのをきっかけに、ズルズルと連敗が続いて脱落。終盤戦は元通りの体を持ってあますような相撲に戻ってしまい 9 勝 6 敗。相変わらず、自分が向かうべき相撲の型が見つかっていないように感じられた。

逸ノ城同様に幕内切っただけの巨漢**魁聖**は、先場所あたりから相撲のスタイルが変わってきた。膝を曲げて低い重心で前に向かって体を運びながら両手が仕事をするという動き方に変わってきた。これまでは、まわしを取らないと仕事ができない相撲だったので、勝つときには強いが負けるときには惨敗だったが今場所は初日から意欲的な動き方が目立った。前頭 6 枚目なので対戦相手にも恵まれはしたが、9 日目まで無敗で走り、不戦勝にも助けられて 11 日目まで 1 敗で、本人がどう思っていたかは別にして賜杯争いの輪の中に居た。終盤は横綱と当てられたりもしたが、終って見れば 12 勝 3 敗で敢闘賞。今場所のような相撲がいつでも取れるようになれば大きな花が咲くのだろうが、そうは行かぬのが世の常。

例によって序盤を 2 連敗で始めて多くの観客に失望を与えた**高安**は、注目を浴びなくなってからは着実に白星を並べて、終盤の優勝争いに顔を出した潜水艦のような相撲。相撲を見る限りでは、恐らく足首か膝に故障があるのは明らかなようだが、それでも 12 勝 3 敗と準優勝同点の星で豪栄道の 9 勝 6 敗と比べてみれば随分立派な大関である。この不安定さが高安なのだろうが、もし名大関として名を馳せ、さらにその上も狙おうと思うならば、これを克服する必要があるだろう。

毎場所少しずつではあるが「らしい相撲」が取れるようになってきた**遠藤**、初日に正しく遠藤らしい取り口で高安に勝ったことでかなりの手応えを感じた。しかし翌日は、善戦しながらも鶴竜に敗退、その後も勝ったり負けたりの日が続き、中日を終わって 4 勝 4 敗。今場所も駄目かなと不安が走り始めるや、後半戦は 5 連勝を含めて 5 勝 2 敗で走り抜けて見事に 9 勝をあげた。勝った相撲はすべて、深く折れ曲がった膝、脚を開いて保つ下半身の安定感、まわしを取れようが取れまいが止むことがない重心を移動するような前進圧力、時には見せる立ち合いの素早い前みつとり、などなど。おっつけの位置と角度、差し手の返し方・・・、教本に示された絵のような動きは素晴らしいの一語に尽きる。東前頭筆頭

で 9 勝 6 敗+技能賞、来場所は新小結になれそうだ。

先場所は良い相撲が取れていながら勝ち星に恵まれず、関脇の座を明け渡すことになった玉鷲、今場所は西前頭筆頭で、9 勝をあげて実力が定着してきていることを強く感じさせた。長軀にも関わらず腰を沈めて、一歩ずつ踏み出しながら左右の手が交互に大きく伸びる突きと押しは破壊力がある。

34 才の玉鷲と 31 才の栃ノ心、しばらくは目が離せない存在だろう。

膝の故障が元で東前頭 14 枚目まで下がった勢は、この場所の星次第では十両に陥落する可能性もあるという状態で、初日を迎えた。前半の相撲を見る限りでは、取組中には解らないが勝負が終わって土俵下に降りた後の行動を見ていると、明らかに脚に不調があることが解る。土俵上では前に出ることを心がけているような取り口だが、受け身になったり下がったりするともろいのが星にも現われている。

11 勝 4 敗でこの場所を切り抜けたが、敗れた 4 敗はすべて今場所絶好調の力士ばかりなので、無駄に負けてはいないようだった。

豊山が攻撃力のある相撲を体得しつつあるような出来栄えだった。突き押しのリズムと足の運びのリズムとの同調に難があるという欠点が是正されてきた。さらに、自分の思い通りの型に持って行けなくても、体全体で前に圧力をかけて進んでいければ勝ちにつながるということが解ってきたことと、何よりも「この一番で勝つのだ！！」という意欲を感じさせる表情になってきたのが良い。西前頭 11 枚目で 10 勝 5 敗、上位力士を相手にどこまで星をあげられるか、来場所が真価を問われる場所になるだろう。

鶴竜は、どことなく頼りない相撲を取ってはいたが白星にはつながっていたという印象が前半戦の土俵。中日を過ぎると少しずつ「劣勢にまわると叩く」という悪いクセが出始めてきたが、何とか 11 連勝。12 日目に栃ノ心に両まわしを取られて横綱相撲を取られてしまった。先場所鶴竜を破って優勝したことで自信を付けてしまった栃ノ心は、取り組み前から「俺の方が強いに決まっている！」という表情で負けていなかった。肉薄する魁星・高安の追い上げをかわして何とか「横綱が優勝」というメンツを保ったが、力強さに欠ける感じは否めず、どことなく能動的でない優勝のような感じがした。

そんなこんなで、やや食い足りなさが残りはしたが、ひとつひとつのシーンには「次の世界」も見え隠れして面白い場所だった。

以上